

デンマークにおけるシニア向けコ・ハウジングに関する研究

上野勝代・横川典視・佐々木伸子*

A Study on Co-housing for Senior Citizens in Denmark

KATSUYO UENO, NORICHIKA YOKOGAWA and SHINKO SASAKI*

In recent years, new demands are being heard from the elderly and senior citizens for new housing alternatives in Northern Europe. Especially, the supply of Co-housing for senior, which is one of the new housing style, is being observed.

The purpose of this paper is to examine "Senior Co-housing" in Denmark.

We investigated two typical Co-housing through interviewing the residents.

The results are summarized as follows;

- 1) Residents want to have more cooperative way of living.
- 2) Each resident is provided with not only an independent dwelling space but also some facilities for common activities.
- 3) The background of establishing these Senior Co-housings is active support by non-profit housing association or public housing association, which fulfilled resident's demands.
- 4) Co-housing schemes can contribute to cutting the public cost of health care and home arrangements for elderly.

(Received August 16, 1994)

1. はじめに

デンマークの高齢者住宅政策は1980年代後半、大きく転換した。それを一言でいうならば、“施設”から“在宅化”，すなわち“住宅とケアをパッケージ”にしたナーシングホームのような施設ではなく、住宅とケアを分離し、高齢者が住み慣れた家で生活できるような住宅の供給と、ホームヘルプや24時間看護の組み合わせをすることであった。1987年に制定された「高齢者住宅法」もこの方向にそって、平均床面積グロス67㎡の設定、地方自治体での多様な供給、助成対象の柔軟指導を認めたものである。

この背景には政府の高齢者対策委員会による検討の結果、その一つとして高齢者は独立した住宅に住む権利を持つべきであるという提言があった。特にナーシングホームが高齢者対策上重要な継続性の原則、自らの資産の利用、自己決定の達成を疎外する要因となっていることを指摘した。これにより、ナーシングホームのような施設の建設はなくなり、すでにある施設も地域の看護やホームヘルパーを利用する Special Housing for Elderlyにコンバートされてきた。

同時に、デンマークの全人口に占める65歳以上の高齢者は1990年に15.6%となり、2030年には20%を越え

京都府立大学生活科学部住生活学講座

Laboratory of Living Life and Housing Problem, Faculty of Living Science, Kyoto Prefectural University

* 徳山工業高等専門学校 土木建築工学科

Tokuyama College of Technology, Department of Civil Engineering and Architecture

ることが推測され、この事は、従来の高齢者政策をこのまま継続するならば、政府・自治体の経費負担が爆発的に増加することをも意味するという背景も存在していた。

さらに、1992年には70歳以上の高齢者の約半数が単身で、配偶者と同居しているのは40%、子供と住んでいるのは7%にすぎず、今後は単身または配偶者と暮らすのがますます一般的になることも予想されてきた。¹⁾

本稿で紹介する“シニア向けコ・ハウジング”とは上記のような状況にあるデンマークにおいて、90年代にはいつて現れてきた新たな住要求であり、人生の第三期を迎えた市民や高齢者たちからでてきたオルタナティブな住宅づくりである。

以下述べる内容は筆者らが1993年8～11月にかけてシニア向けコ・ハウジングのプロジェクトを訪問調査し

た中で収集した資料、ヒアリング内容、SBI（デンマーク建築研究所）での報告書、EC主催のシニア向けコ・ハウジング会議（1993年9月開催）よりまとめたものである。

2. シニア向けコ・ハウジング

デンマークにおいてのシニア達によるコ・ハウジングの動きは、80年代後半から90年代に入ると活発になり、その数は現在約20例を数えるようになった。

シニア向けコ・ハウジングとは、簡単にいうと、50歳以上のまだ健康な壮・高齢期の人たちが、“プライバシーを損なわない形で助け合いながら共住する”ことである。ここで強調されるのは、あくまで共同の住居であって、生活の共同ではないといわれている。²⁾

また、イギリスのシェルタードハウジングとは異なる

表1 シニア向けコ・ハウジングの概要

プロジェクト名	所在地	グループ成立年	入居開始時期	所有形態	居住者数	住戸数
Mariendalsvej	Frederiksberg	1989	1992	年金者組合	6	22
Midgardsgruppen	Kobenhaven	1982	1987	非営利（賃貸）	9	9
Mjølnerparken	Kobenhaven	1987	1987	非営利（賃貸）	9	9
Septembergrden	Tastrup	1990	進行中	住宅協同組合	20	10
Egely, Egebjerggard	Ballerup		1994	混合	進行中	32
Fællesby	Horsholm	1992	進行中	住宅協同組合	進行中	進行中
Otium	Birkerød	1984	1988	住宅協同組合	22	15
Gimle	Birkerød	1990	1993	住宅協同組合		12
Andelsboligforeningen af 1899	Roskilde	1992	進行中	住宅協同組合	25	進行中
Andelsbolig. Vnget	Hoibk	1992	進行中	住宅協同組合		20
Rynkebakken	Lejre	1992	進行中	住宅協同組合	20	20
Optimisternes fællesbo	Odense	1989	1992	非営利（賃貸）	23	22
Det kreative seniorbo	Odense	1989	1992	非営利（賃貸）	18	12
Hammeren	Agerdrup	1989	1992	非営利（賃貸）	24	20
Langeskov	Langeskov	1992	進行中	住宅協同組合	進行中	進行中
Meldalshave	Faaborg	1992	1994	住宅協同組合	12	12
Fjordgarden	Faaborg	1991	1992	住宅協同組合		8
Ringe-Rysiling-Arslev	Ringe	1990	進行中	住宅協同組合	30	18
Seniorgarden	Kolding		1982	非営利（賃貸）		12
	Esbjerg	1992	進行中		進行中	進行中
	VEIJE	1992	進行中	非営利（賃貸）	7	7
Andelsboliger i Holstebro	Holstebro		1985	住宅協同組合		28
Fælles Bo Thy og omegh Thisted	Thisted	1992	進行中	非営利（賃貸）		8
Frederiks Alle	Arhus	1990	1993	老人住宅	15	15
Andelsboliger i Marslet	Marslet		1988	住宅協同組合		51
Posthaven	Grenaa	1991	1992	住宅協同組合		16

（資料：Ivor Ambrose “Etablering af seniorbofællesskaber”
1993年 SBI調査報告書より）

り、ボーデンが常駐して管理するのではなく、ケアは自治体が責任を持って外部から行う形態を取る。その基本的なアイデアは、20戸くらいに住む人々がかなり定期的に一緒に食事をし、日常の雑用では助け合いを行うことである。

ただし若い世代やファミリータイプのコ・ハウジングとは異なり、食事作りの義務はない。共有の設備をもったとしても、そこにはかならず参加しなければならないという義務はなく、どのような活動を共同で行うかなどはまさに千差万別、個々のプロジェクトでかなり異なる。

このプロジェクトの空間的な特徴は、プライバシーを尊重した独立した60~80㎡の住戸と、豊かな協同生活やコミュニケーションを可能にする共用空間を持っていることである。共用空間としては、共用庭、食堂、趣味室、図書室、ランドリー等である。各プロジェクトの大きさは12~69戸であり、20~30戸が最小単位として望まれている。

注目されねばならないことは、入居予定者による計画段階からの積極的<参画>である。さらに、実現へのプロセスで重要なことは、シニア達が高齢になった時どのように生きていくのかという問いからスタートし、自分自身を探す<知的な旅>というプロセスをとるところにある。そのプロセスは表2に示されるような十段階があるといわれている。

このことは入居者の特徴として、「戸建てに住むことによる煩雑な仕事から逃れるためもありますが、人生をどのように生きていくかをきちんと考えている人達で、彼らに取っては高齢になって身体が弱り、他人

表2 設立までのプロセス
Establishment process-10 themes

1	(“どのように生きたいのか” についての) 個人的主観 Scope of the individual citizen
2	グループの結成とアイデンティティの確立 Forming a group and building up identity
3	課題の取りまとめ Formulating the problem
4	企画案の提示 Formulating project proposals
5	地方自治体との計画づくり Municipal planning
6	資金 Funding
7	認可 Approvals
8	制度と特別な協定 Dispensations and special agreements
9	計画, 設計, 経費 Planning, design and economies
10	入居と開始 Moving and starting up

(資料: Ivor Ambrose “TAILOR-MADE CO-HOUSING FOR SENIOR CITIZENS”
1993年9月CO-HOUSING会議資料より)

表3 入居の動機と評価

入居の動機と評価 (調査対象プロジェクト名/年齢/性別/家族構成)
夫がなくなって呆然としていたので、こういうプロジェクトを知り、役所を捜し回り、電話してまだ2戸残っているとき、大急ぎで申し込んだ。会合にでてどんな人達と一緒に住むのかわかったので良かった。私はこの会に入った途端に仲間に入ったという気がした。入居してよかった。 (Optimisternes/70代/女/独身)
私の夫はハンディキャップで喋れない。しかしここに入居すると私は自分の家からでて他の人とおしゃべりすることができ、入って良かった。 (Optimisternes/70代/女性/夫婦)
AOF (成人学校) を通してここを知った。老人だけで住むことについては知人・友人は本当に大丈夫かと心配してくれたが、入居前に長い期間かけて2週間に1回は集まってお互いに知り合いになったのでよかった。 (Optimisternes/70代/男性/独身)
ここに入る多くの人はデンマークのことわざに“私達はお互いの足を痛みがないように蹴りあえる”というような仲間を求めて、お互いに一緒に仲間の楽しさを目指して入る人が多い。ここで良いことは、これ以上嫌だと思えば自分の住戸に帰れる、入れるのが良い (各住戸に鍵をかけることができるのが良い)。 私達がこうして一緒に住むと、普通のアパートや持ち家に1人で住んでいるよりも最終的には老人ホームや病院に行くことを3年位は遅らせることができるのではないか。これは社会にとってはお金を節約することができる。 (Optimisternesの自治会長/70代/男性/独身)
250㎡で8室ある大きな家を管理しにくいので移った。年間200万円も払って管理していた。年をとったら、大きな家から小さな家に移るのは当然だと思う。転居するとコスト的には高くなるが、管理できなくなって荒れ果てる前に家を移りたかった。 (Mariendalsvej/60代/男性/夫婦)

から老人ホームに入れられる前に自分自身を高齢者ホームに入所させることが大切なのです。ですから彼らは展望を持っていて、どちらかといえば予防的な態度を取っている。これはデンマークにおいても希なケース」とシニア向けコ・ハウジングを調査したアンブローゼ氏は語る。同時にこのような住居作りには、哲学者であり、現代デンマーク精神の父、成人教育に関して著名なN. F. S. グルントヴィ³⁾の影響があると語る。

設立主体は、非営利住宅協会、住宅協同組合、民間の共同所有者協会など多様であり、また所有形態としては、賃貸、居住権方式ともにある。

この供給が起こってきた背景には、一人で住むことの“寂しさ”，住戸改善や管理の困難さという居住者

側が抱えている問題がある。

同時に行政の立場からは、高齢者自身が共同して助け合い活動をすることによって医療関連費や高齢者施設への入所などの経費を節減できることが期待され、関心が高まってきた。

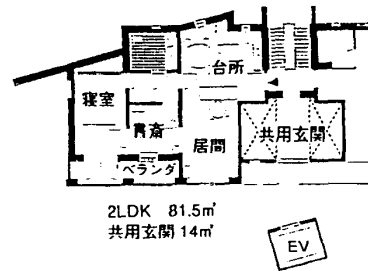
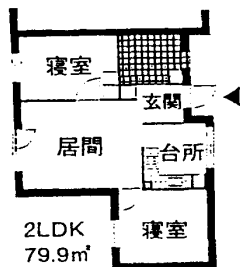
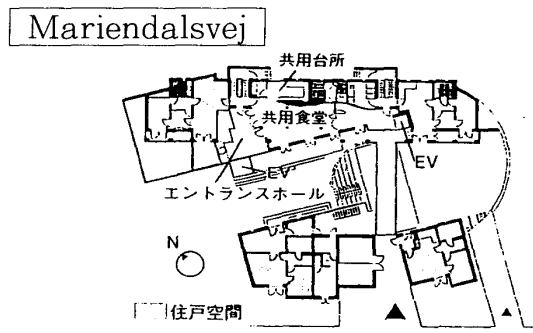
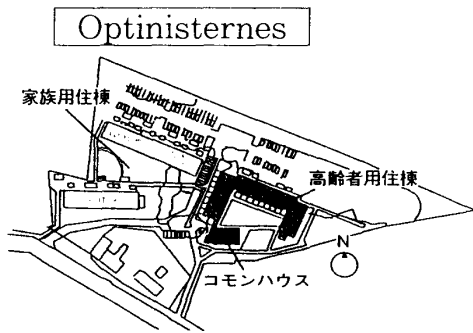
以下、具体的事例を紹介する。

3. 事例1 Optimisternes fællesbo－楽天主義者たちのプロジェクト

童話作家アンデルセンの故郷であるオーデンセ市の郊外に1992年につくられた“楽天主義者”達のプロジェクトは、老人ホームに入所していた身体障害を持った人が新聞に投稿し、成人学校に呼びかけたのを契機に

表4 事例調査対象の概要

名称/建設年	Optimisternes Fællesbo/1992年	Mariendalsvej/1992年
所在地	デンマーク オーデンセ市	デンマーク コペンハーゲン
設立主体	非営利住宅供給公社	協同組合
入居形態/戸数	賃貸方式/高齢者用 22戸	居住権方式/22戸
住戸タイプ ^{注1)} および面積	1LDK 18戸 (64.9㎡) 2LDK 4戸 (79.9㎡)	2LDK 17戸 (約80㎡) 1LDK 5戸 (約65㎡) (図面と外観より推測した)
共有空間	共用台所、共用食堂(集会室兼用、2室に利用可能)、クローク、ランドリー	共用台所、共用食堂、プール、ゲストルーム (26㎡)
立地条件	市街地の住宅団地内 ^{注2)}	都心部の市街地
入居者像	入居者数	23人
	入居の条件	14戸入居(人数不明)
	年齢構成	55歳以上の年金生活者
	平均年齢73歳	50歳以上70歳未満介護を必要としない人
		不明



注1) 居室数の表現に関しては、3 room typeを2LDKと日本式に変更している。
注2) 隣接する若い世代向けの家族棟と協同でコモンハウスを利用する。

資料Ⅰ シニア向けコ・ハウジングの成立過程

Ⅰ 開始段階

- 1988年11月 SUM（実験的な施策に補助金を与える政府機関）の補助金をもらうための、高齢者の居住形態に関する研究会を開く話がもちあがる。
- 89年1月 オーデンセの非営利団体「AOF」が今後3年間で、1,175,500 Dkrの補助金を申請。その目的として、『孤立して住むよりも共同で住むほうがより魅力的だということを市民に啓蒙する』ことを挙げる。
- 89年2月 AOFが「シニア向けコ・ハウジングー新しい居住形態」という住民向け講義を開く。
- 89年4月 補助金が2年間で400,000 Dkr おりることが決まる。その対象はプロジェクトのリーダーやコンサルタントとされる。
- 89年5月 プロジェクトの実行に関するAOFとオーデンセ市の話し合いが持たれ、高齢者のグループを3つに分けることが決まる。

Ⅱ 学習段階

- 1989年7月 シニア向けコ・ハウジングプロジェクトに関する説明会が開かれる。
- 89年8月 AOFはLinda Hoegmarkをプロジェクトリーダーに任命する。
- 89年 秋 住民のコ・ハウジング研究会が形成され、AOFの主催で勉強会が開かれ始める。
- 89年11月 他のコ・ハウジングへの見学会や、メンバーの交流のためのフィヨルドツアーが開かれる。

Ⅲ 設計準備段階

- 1989年12月 “楽天主義者” プロジェクトの最初の設計プランが、Lindaに渡される。
- 90年1月 TV-FUNがプロジェクトを取材。AOFとオーデンセ市は、5月に住宅会議を開くこと、シニア向けコ・ハウジングのビデオをだすことを決定。
- 90年9月 「90年代の居住形態」をテーマとした会議がオーデンセで開かれる。また、ビデオ「シニア向けコ・ハウジング・その可能性」発刊。
- 90年7月 SUMの報告書にコ・ハウジングのことが記載される。

Ⅳ 建設・入居段階

- 1991年 上記ハンドブックが「Sammen-og dog big seiv」（直訳すると“共同—しかし自分自身で”）として出版される。
1年を通して断続的にミーティングが開かれる。“Optimisternes”と“Kreative”の2つのプロジェクトに政府の非営利住宅建設割り当て許可が出る。
- 92年2月 SUM補助金の対象期間が終了。
- 92年7月 “Optimisternes” 入居開始。
- 92年10月 “Kreative” 入居開始。
- 92年12月 “Hammeren” 完成。

（資料：Ivor Ambrose “Etablering af seiorbofællesskaber” 1993 SBI調査報告書より）

生まれたものである。このプロジェクトにおいては、当初参加したのは30人であったが、22戸に最終的に入居したのは23人（男6人、女17人）である。参加者たちは2週間に1回集まり、他の住宅の見学や話し合いをする中でグループが結成され、アイデンティティが形成されていった。

またこのプロジェクトは開始段階より地元テレビ・ラジオ局によって頻繁に取材され、計画の進行状況や住民達の意見が報道された。

“楽天主義者”たちの住棟は、デンマークらしい農家が点在する中にあり、他の年齢階層とのインテグレートが考慮され、集会室、共用食堂、台所、ランドリーのある共用棟は若世代（28戸の）との共用である。各戸の台所が廊下に面し、かつガラス窓となっているのは、居住者の意見、特に女性の意見の反映である。

共同生活としては、月1回夕食会を開き（16～18人が参加）、週に1回午後7～10時を使ってお茶会を開いている。このときはダンスに興じたりもする。指導者は市の福祉課から派遣された人である。

家賃は3000Dkr（約5.5万円）、共用スペースの掃除は管理人の仕事である。ただし共用スペースの管理責任及び管理費用の負担は、Optimisternesの住人がおっている。

ホームヘルパーは市から派遣されるが、ヒアリングをした住人のAさんは2週間に1回1時間の掃除、Bさんは週1回1時間の掃除を依頼し、他の2人は援助を受けていない。食事は市からの配達や近くのセンターでとることも可能であるが、好物をつくりたいため男性2人は自分で調理していた。

4. 事例2 Mariendalsvej—マリエンダールのプロジェクト

1989年春、法律家とエコノミストという高学歴者達の年金者同盟は、パイロット事業として22戸のコ・ハウジングを建設することを決定した。この計画のキーコンセプトは“高齢化”と“エコロジー”である。

背景には、高齢者に適した住宅ストックの不足、新規住宅建設戸数が減少傾向にある中で、高齢者のニーズに応えた住宅の供給を期待するのは困難だとの予想、さらには住宅市場の流動性が小さく、住居の住み替えも容易ではない、といった問題が存在していた。そしてその解決策として新たな高齢者住宅を自ら建設することが選択された。

また、この住宅はサービスや文化施設へ容易にアクセスできること、安全でかつなじみ深い環境に住むことを重視して、都心部であるコペンハーゲン市街に立地が設定された。

居住予定者10人が参加した会合は、3年間にわたって1～2カ月おきに開かれ、他のコ・ハウジングやエコロジーシステムの見学会を重ね、煮詰まったところ



写真1



写真2



写真3

で建築家に委ねた。また、設計作業中においても居住者の意見は重視されており、100分の1、20分の1スケールで模型が作られ、特に住戸部分では実寸のモデルを作り、居住者を交えて高齢者に適した設計の詳細な検討が行われている。

92年に完成した同プロジェクトは首都圏美化賞、フレデリックスヴェア地区の建築賞を受賞した。住戸計画としては多様な住戸タイプ、豊かなセミプライベート空間、全面積の20~25%を占めるプールや食堂など充実したコモン・スペース、オープンなアクセス空間、植物、水、魚を使ったエコロジー装置等々随所に

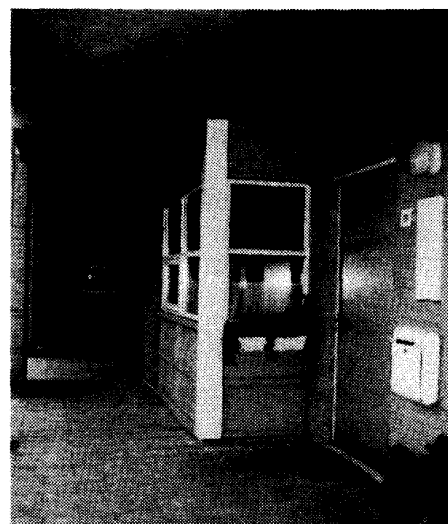


写真4

(写真説明)

- 写真1 住居棟より中庭をみる
コモンハウスと住居棟にかこまれた広々とした中庭は、外部の音を遮断し静かで明るい窓を各住戸に提供している。
- 写真2 コモンハウスでの居住者たち
- 写真3 コモンハウスの食堂
食事会やミーティング、ダンスの会等があり、集まる機会が多い。
- 写真4 通路に面した台所の窓
室内通路からお互いを見ることができるよう設計されている。

“Quality of Life” を空間的に追求しているといえる。

しかし、不況下のデンマークにあっては家賃が高く(年間75,000Dkr, 約150万円)、公開募集したが、筆者の訪問した昨年8月にはまだ8戸が空き家のままであった。

ヒアリングをしたE氏は昨年退職し、夫婦で入居したが、その動機として「広い家の管理の困難さ」を挙げている。同時に、退職後の生き方は退却の論理だと説明する。

管理は現在管理会社に委託されているが、全戸の入

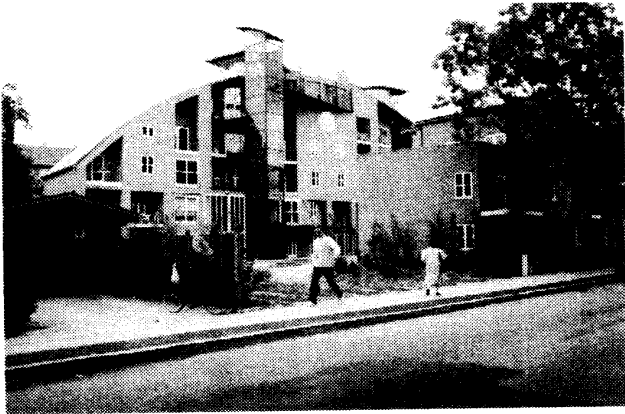


写真5



写真8

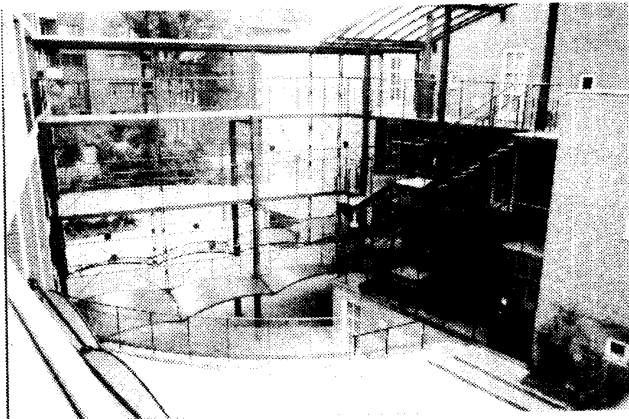


写真6



写真9



写真7

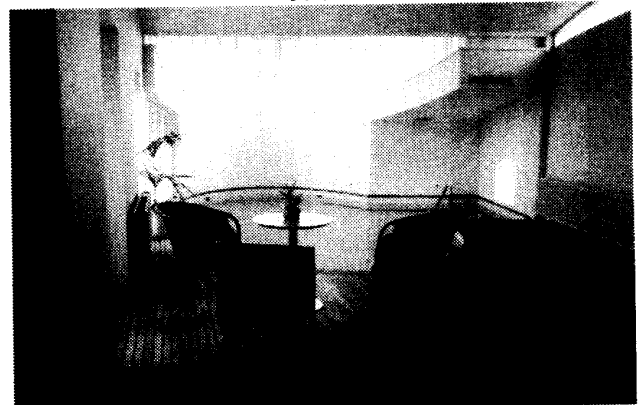


写真10

(写真説明)

- 写真5 通りから見た外観
煉瓦と鉄の外壁材は周囲の古い町並みとの調和に配慮されて用いられている。
- 写真6 中庭部分の渡り廊下
外部空間に変化をもたらすための段差とバリアフリーの動線が交差する中庭。
- 写真7 入居者夫婦とその住居
以前住んでいた大きな家から持ってきた使い込まれた家具をうまく配置した室内。
- 写真8 共用食堂
対面式の台所を持つ食堂は一度に50人が利用することができる。
- 写真9 二世帯共用のエントランスホール。
共用エントランスとは別に各住戸にも共用玄関が設けられている。
- 写真10 共用プール
最上階に設けられている廃熱を利用した温水プール。

居者が決まれば、自主管理へ変更するというのである。共同生活に参加するかどうかは自由で、共同の食事作りはされていない。

このプロジェクトの評価としては「さまざまな共用施設がある」ことをメリットとして挙げているが、家賃は決して安くなく、コモンスペースを使い切ってこそ初めて高くないと評価されるとE氏は述べている。

5. おわりに

デンマークで近年活発になってきたシニア向けコ・ハウジングの特徴を要約すると次のようになる。

- ①コ・ハウジング建設運動は、老人ホームという施設の充実や、在宅での住戸改善と同時に、人生の第三期にはいろいろとする人々が生き方、ライフスタイルを大事にし、住戸や隣人を選ぶといった自己決定権を追求した要求から出発したオルタナティブなものである。
- ②これは個人的なプライバシーの確保と同時に生活の協同化方式を統一した住戸形式である。空間的には一戸の住戸として完結できる広さ（60㎡以上）が確保され、あわせて食堂、台所、ランドリー、庭、作業室等の共用空間を持っている。
- ③この住宅が起ってきた背景には、一人で住む高齢者達の“寂しさ”の問題や、住宅改善が経済的にも困難だという問題点がある。一方、行政の立場からみると、高齢者自身が相互に積極的な助け合い活動することは医療や高齢者の施設、住宅部門の経費を削減できることになるという点が注目されてきた。
- ④家族向けコ・ハウジングづくりとは異なり、シニアを対象とした場合には、日常生活においてはより緩やかな＜協同＞と＜共同＞が求められていることが注目される。同時に実現へのスタートにおいては、人生の第三期の生き方を考えることが大切であることが示された。
- ⑤このような居住者達のムーブメントに対しては、敏感にそのニーズをとらえ、それを生かしていく非営利住宅協会や住宅協同組合の存在が重要であることが挙げられる。
- ⑥デンマークでのこのような試みを学ぶ際に見落としはならないことは、単に住宅の質が良いことだけでなく、ホームヘルパー制度や老人ホームなどの福祉が充実し、住宅手当や協同組合方式への公式

サポートという住宅政策面での整備がなされていることである。これらのシステムが共に充実してこそ、ごく一般の人々が自己の第三期の住み方を自由に選択できるといえる。

〔注〕

- 1) Georg Gottachalk; 「デンマークにおける高齢者向け住宅とケアサービス—近年の改革」：日本住宅会議・国際住宅会議での報告より 1993年8月
- 2) 1993年9月のシニア向けコ・ハウジング会議最終日に、デンマークの住宅・建築省のS.P.ハンセ女史によって会議のまとめの中で報告された内容。
- 3) N.F.Sグルントヴィ（1783～1872）は今日のデンマークの原動力となった“フォルケホイスコーレ”（民衆の大学）を構想した哲学者。その教育思想の中心は『相互作用と対話』といわれ、人は生まれながらにして、他者とのコミュニケーションを求め、それによって育つと考えられている。他者との生きた言葉によるコミュニケーションをグルントヴィは『相互作用』と呼ぶ。

日本ではかつて『国民高等学校』と訳され、大正時代から昭和初期にかけて農村振興の模範例として精力的に紹介された歴史があるが、一部の例外を除き、不十分な理解のために、皇国教育や満蒙開拓の農民訓練に荷担したため、その正しい理解が疎外されたといわれている。

自由と人間解放をめざす成人教育の場としてのフォルケホイスコーレはデンマークで現在約100校あり、ノルウェー、スウェーデンなど他の諸国にも大きな影響を与えた。（オヴェ・コースゴール、清水満編者、「フォルケホイスコーレ」の世界、1993）

参考資料

- 1) Ivor Ambrose; Tailor-made Co-housing for Senior Citizens (1993)
- 2) Ivor Ambrose; Danish Co-housing for Elderly Person (1994)
- 3) SBI; Better Housing and Living Conditions for Older People—Case Studies from Six European Cities (1993)
- 4) Danish Ministry of Housing and Building; Housing for the Elderly in Denmark (1990)